



## 登校拒否の予兆研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学旭川分校障害児教育研究室 公開日: 2017-07-25 キーワード: 作成者: 石黒, 一次 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00007675">https://doi.org/10.32150/00007675</a>

# 登校拒否の予兆研究

石 黒 一 次\*

## 1 目 的

わが国で登校拒否に関する問題が注目され始めてから20年余りの年月を経ている。しかし、登校拒否問題は年々深刻化の途をたどっており、長期にわたる登校拒否状態を呈する子供たちの苦悩は勿論のこと、父母、教師を始め諸々の関係機関においても、その対応と指導に苦慮しているのが実情である。

登校拒否状態が、一度深刻化してしまった後の対応と指導の困難性は、登校拒否児に関与したことがある者のだれしもが一致して認めるところであり、早期発見・早期対応が、登校拒否研究の今日的課題として重視されている。

登校拒否は突然起こるのではなく、そこに至るまでには、登校拒否傾向児として何らかの「予兆」を呈しつつ登校を続けているものと考えられる。子供たちにとって学校は家庭に次ぐ第2の生活の場であり、「学校があるからこそ、登校拒否がある」という視点からも、学校現場での教育活動が、登校拒否予防に果たす役割は重要であると考えられる。

本研究では、登校拒否の予兆と考えられる行動や認知特徴を明らかにしつつ、その背景となる要因を児童の学年段階別に分析することにより、学校現場を中心とした登校拒否傾向児の早期発見と適切な対応・指導のあり方への手掛かりをさぐるものとするものである。

## 2 方 法

### 1. 登校拒否の予兆項目の抽出

登校拒否児が登校拒否状態に至る前後の時期に示した行動や認知特徴を「予兆」ととらえ、事例資料<sup>※</sup>及び従来の登校拒否研究文献<sup>1), 2)</sup>から、特に学校場面に関係が深いと思われる予兆項目を抽出し、登校拒否傾向測定質問紙を作成する。

### 2. 登校拒否の予兆に関する実態調査（第1次調査）

#### (1) 調査の対象

北海道函館市立小学校3校（T小学校、Y小学校、M小学校）普通学級在籍全学年全児童、総計1,575名。

#### (2) 調査の目的と方法

前述の質問紙により、小学生児童の登校拒否傾向（以下拒否傾向と略す）の程度を測定し、低（1～2年）・中

（3～4年）・高（5～6年）学年別（以下、学年段階別と略す）に、その程度と予兆の傾向を比較考察する。また、学年段階別の登校拒否傾向測定尺度を作成する。

### 3. 予兆の要因に関する実態調査（第2次調査）

#### (1) 調査の対象

前出のT小学校を対象とし、第1次調査回答児童のうち、学年段階別に拒否傾向が大の者（回答の得点化により、 $\bar{X}+1SD$ 以上）と小の者（ $\bar{X}-1SD$ 以下）を合わせて50名前後抽出し、合計約150名とする。

#### (2) 調査の目的と方法

前述抽出児童の拒否傾向の程度の違いにより、下記項目にわたり、学年段階別に予兆の要因を分析する。

① 児童に関して—性格特性、親子関係、友人関係、教師関係、学習態度、知能・学業成績・成就段階、教科の好き嫌い、出席状況、ソシオメトリー

② 家庭に関して—家庭環境、養育態度

③ 学校に関して—学級担任からみた児童の性格特性・友人関係・教師関係・学習態度

#### (3) 調査期間（第1次調査及び第2次調査）

1983年11月2日～11月22日

## 3 結 果

### 1. 第1次調査の結果と考察

原岡<sup>1)</sup>の作成による質問紙を参考に、合計33の予兆質問項目（表1）からなる登校拒否傾向測定質問紙を作成した。質問の反応を「はい」「いいえ」の2件法で求め、予兆を示す反応に2点、示さない反応に1点を与え、33項目の総得点により拒否傾向の程度を測定した。

#### (1) 調査実施率（回収率）

調査対象児童のうち1,523名（96.7%）の回答があった。

#### (2) 得点別度数集計結果

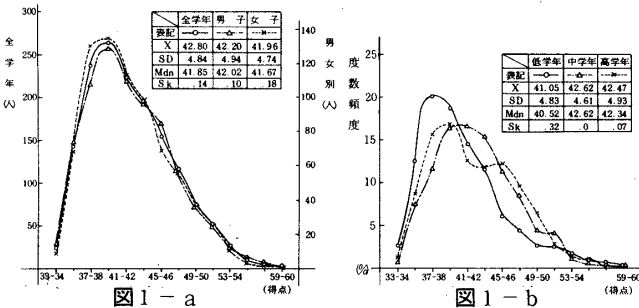
全児童の得点は、最低33点から最高60点の間に分布し（ここでは高得点ほど拒否傾向大である）、全児童平均値：42.08、標準偏差値：4.84、中央値：41.85、歪度：0.14で、やや正の歪型を示す正規型分布曲線（図1-a）となった。また、学年段階別の得点別度数を百分率で比較した分布曲線を図1-bに示すが、全て正規型と認められ、本調査で作成した質問紙による統計分析の妥当性が確かめられた。

\*北海道教育大学情緒障害教育教員養成課程

※筆者が担当した事例の他、北海道旭川児童相談所における事例提供の援助をいただいた。

表1 登校拒否傾向質問項目

1. あなたは 学校へ行くのが楽しいですか。
2. あなたは 学校を休みたくないとおもいますか。
3. あなたは 学校で勉強するのがうれしいですか。
4. あなたは 朝なんとなく学校へ行きたくないときがありますか。
5. あなたは 学校にいても家のことか気になることがありますか。
6. あなたは 朝学校へ行くところになって 急に頭やお腹がいたくなることがありますか。
7. あなたは 学校さえなかったら毎日楽しいだろうとおもいますか。
8. あなたは 学校をよく休むほうですか。
9. あなたは 学校の勉強がおわったら すぐ家に帰りたいとおもいますか。
10. あなたは 学校にいるとき きびしいとおもったことがありますか。
11. あなたは 学校のほうが家にいるときよりもきゅうくつですか。
12. あなたは 学校でいやなことばかりあるとおもいますか。
13. あなたは 学校の門や玄関が見えてきたら 学校へ行きたくなくなることがありますか。
14. あなたは 寝ぼけたりぐずぐずしたりして 学校に遅れることが多いですか。
15. あなたは 転校したら もっと学校が楽しくなるとおもいますか。
16. あなたは 学校の休み時間など ひどりでいることが多いですか。
17. あなたは 朝学校へ行く前に 何度もオシッコがしたくなりますか。
18. あなたは 病気で学校を休んだあと 友達に何か言われそうで 学校へ行きづらくなるほうですか。
19. あなたは 春休みや夏休みのあと 学校へ行きたくなくなることがありますか。
20. あなたは 学校で頭やお腹がいたくなって 保健室へ行くことが多いですか。
21. あなたは 時間割調べや宿題などをきちんとすませないと とても気になるほうですか。
22. あなたは 学校で班長やみんなの代表になりたくないとおもいますか。
23. あなたは 学校で仲間はずれになることが多いですか。
24. あなたは 学校でわかっていても手をあげたり発表しないことが多いですか。
25. あなたは 学校でいやだとおもっても 友達のことをきくことが多いですか。
26. あなたは 学校で自分のロッカーや机の中がきちんとしていないと気がすまないほうですか。
27. あなたは 教室の席が自分の席でないような気がするすることがありますか。
28. あなたは 学校でたくさんの友達と遊んでいても自分だけ仲間はずれにされているような気がするすることがありますか。
29. あなたは 学校で何でもないの口の中がカラカラ乾いているような気がするすることがありますか。
30. あなたは 学校でできない勉強がある日は休みたくなくなることが多いです。
31. あなたは 給食の好ききらいがたくさんあるほうですか。
32. あなたは 学校へ行く途中 だれかにジッと見られているような気がするすることがありますか。
33. あなたは 学校で友達で自分の悪口を言っているような気がする事が多くありますか。



(3) 登校拒否傾向の比較分析

得点平均値の違い(表2)により、拒否傾向の程度を比較すると、学年段階間では、 $F=15.87$ 、5%水準で有意差がみられ、低一中学年間： $t=5.14$ 、低一高学年間： $t=4.68$ で、中・高学年共に低学年より拒否傾向大の有意差が示され、中一高学年間には $t=0.5$ で有意差はなかった。また、各学年間では、 $F=8.98$ で有意差がみられ、第2学年一他学年間で特徴的な有意差が示され(表3)、他の学年間には有意差はなかった。表3によると、第2学年は、他の全ての学年に比べ拒否傾向小であり、時田<sup>3)</sup>の第2学年での登校拒否発症数が最も少な

く出現率も低いとの報告と一致しており、第2学年の予兆項目反応状況に関心が持たれる。

表3 平均値の有意差検定(第2学年一他学年間)

高平均値順	6年	4年	3年	5年	1年
t	5.64	5.38	5.35	4.52	3.39

$F=8.98$   
 $df=5, 1517$   
 $\alpha=0.05$

次に、性差による比較をすると、全児童男一女間： $t=0.95$ で、有意差はなかった。学年段階内男一女間では中学年： $t=2.37$ で男子が拒否傾向大である有意差が示され、低・高学年には性差による有意差がなかった。更に各学年内男一女間では、第3学年の男子のみに、 $t=1.80$ 、 $P=0.07^+$ で、拒否傾向が強いことが示された。

(4) 予兆(質問)項目別反応状況の考察

33の予兆項目別の反応度数及び頻度(%) (表4)により、児童の予兆項目反応状況を考察すると、反応頻度が50%以上を示した項目(以下、要点を記す)は、全児童では、⑨放課後はすぐ家に、⑳学習準備が、㉑整理整頓が、の3項目である。㉑㉒については、学校、家庭共に意図的指導がなされており、予兆として判断しにくい項目であると思われる。また、⑨は現代児童の学校認知状況の一端が示されたように思われる。低学年では前出㉑㉒の2項目のみであり、⑨は46.5%と半数に近い反応であった。中学年では、㉑⑨㉒の頻度順であげられるが、⑨は男子が72.7%、㉒は女子が80.4%と高頻度の反応であり、性差による行動・認知特徴が現われる時期を示すものと思われる。更に、④朝なんとなく、㉑班長や代表には、の2項目が加わり、朝は学校に抵抗感を持ち、リーダー志向回避感を持ち始めていることが示された。高学年では、㉑⑨④㉒㉑の頻度順の5項目に次いで③学校で勉強するのが、㉒わかっていても、の学習態度に関する項目が加わってきている。また、㉑整理整頓が、については、男子が36.6%と、低・中学年では、高頻度であったものが逆転している。

次に、反応頻度が10%以下を示した項目に着目すると、全児童では、⑰登校前オシッコが、㉑保健室へ、の2項目である。低学年では、⑰㉑に加え①学校が楽しくない、が、6.6%と低頻度であり、9割以上の児童は「学校は楽しくない」とは認知していないことが知らされた。中学年では、⑰㉑に加え、⑧学校を休む、⑮転校したら、高学年では、同じく⑰㉑に⑧のみが加わっている。

更に、最も拒否傾向小であった第2学年の反応状況反

表2 男女別・登校拒否傾向質問項目得点平均値( $\bar{x}$ )及び標準偏差値(SD)

	全学年			低学年			中学年			高学年			1年			2年			3年			4年			5年			6年		
	全体	男子	女子	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女
N	1,523	763	760	470	233	237	515	290	225	538	240	298	228	123	105	242	110	132	259	142	117	256	148	108	268	118	150	270	122	148
$\bar{x}$	42.08	42.20	41.96	41.05	40.85	41.24	42.62	43.04	42.07	42.47	42.49	42.46	41.82	41.82	41.83	40.32	39.77	40.32	42.61	43.07	42.04	42.63	43.02	42.10	42.24	41.80	42.58	42.71	43.16	42.33
SD	4.84	4.94	4.74	4.83	4.90	4.77	4.61	4.79	4.32	4.93	4.91	4.96	5.10	5.39	4.77	4.45	4.04	4.74	4.57	4.74	4.31	4.66	4.85	4.36	5.20	5.19	5.20	4.64	4.54	4.71

応度数表は省略)について考察すると、頻度50%以上の項目は、前出⑳㉔のみであり、頻度10%以下の項目には、前出①⑬⑱⑳に加え、⑩学校にいる時さびしい、⑭遅刻することが、の計6項目があげられるほか、他の学年に比べ、全般的に拒否傾向反応頻度が低く、学校生活に最も適応を示す学年であると考えられる。

以上、第2学年を境に学年がすすむにつれ、高頻度の反応を示す予兆項目が増しており、拒否傾向児の多様化及び予兆要因の重層化が考えられる。

#### (5) 学年段階別登校拒否傾向測定尺度の作成

前出33の予兆項目について、原岡<sup>1)</sup>の尺度作成にならう、小学生児童低・中・高学年段階別登校拒否傾向測定尺度を作成した。学年段階ごとに、拒否傾向大群(高得点より100名抽出)をG(Good)群とし、拒否傾向小群(低得点より100名抽出)をP(Poor)群とし、G-P分析によりG・P両群間の反応数(表4)の違いに0.1%以下の水準で有意差を示した予兆項目を抽出し、測定尺度(表5)とした。この結果、前出㉔学習準備が、㉔整理整頓が、の2項目は、中・高学年で有意差は示されなかった。また、学年段階の反応状況により測定尺度から除かれたものの、有意差を示した項目については、予兆観察視点として十分活用できるものとする。

#### (6) 学年段階別予兆特徴の比較考察

G-P分析の結果(表5)、低学年では31項目、中学年では30項目、高学年では27項目に、測定尺度としての

有意性が確かめられた。また、G群の反応頻度が全体の反応度数の50%以上を占めている項目(表4)は、低学年で13項目あるのが、中学年5項目、高学年4項目と急減している。これらは、予兆反応を示す児童が、低学年ではある程度定まっておき、中学年以上ではそれが定かではない状況を示しているものと考えられる。

そこで、学年段階別の予兆特徴として、より「尖度」の高い項目を把握するため、高尖度項目の基準を①全体の反応度数は少ないが、その大半をG群の反応が占めている、②全体の反応度数が、G群の大半の反応により占められている、③全体の反応度数が多く、G群特有の反応とは認め難い、の3種に大別した反応状況の順に定めた。従って、低尖度になるにつれ、他の多くの児童も反応を示す項目である事を意味し、G群の反応頻度と全体の反応頻度との比： $(G群の反応頻度 - P群の反応頻度) / (全体の反応頻度)$ の式により、予兆項目尖度指数を求め、指数値の相対比較で高尖度項目順に4群に分類(表5)した。ここで、高尖度項目第1群を抽出(図2)し、学年段階別の予兆傾向を比較すると、全学年段階に共通して㉔㉕㉖があげられ「学校でいやなことばかりある」「病欠後、友達に何か言われそうで登校しづらい」「嫌いな勉強がある日は学校を休みたくなる」等と思っていることが、拒否傾向特有の予兆特徴として示された。また、低・中学年に共通して㉔頭痛・腹痛で保健室へ、があげられ、中・高学年に共通して㉔仲間はずれになることが、

表4 質問項目別総反応度数、G群・P群反応度数(人)及び総反応度数に占める割合(%)

項目番号	全学年 (N <sub>A</sub> 1523)						低学年 (N <sub>L</sub> 470)						中学年 (N <sub>M</sub> 515)						高学年 (N <sub>H</sub> 538)											
	全体						G <sub>L</sub> (100)			P <sub>L</sub> (100)			全体			G <sub>M</sub> (100)			P <sub>M</sub> (100)			全体			G <sub>H</sub> (100)			P <sub>H</sub> (100)		
	f <sub>A</sub>	f <sub>A</sub> /N <sub>A</sub>	f <sub>男</sub>	f <sub>男</sub> /N <sub>男</sub>	f <sub>女</sub>	f <sub>女</sub> /N <sub>女</sub>	f <sub>L</sub>	f <sub>L</sub> /N <sub>L</sub>	f <sub>G</sub>	f <sub>G</sub> /N <sub>G</sub>	f <sub>P</sub>	f <sub>P</sub> /N <sub>P</sub>	f <sub>G</sub>	f <sub>M</sub> /N <sub>M</sub>	f <sub>G</sub>	f <sub>G</sub> /N <sub>G</sub>	f <sub>P</sub>	f <sub>P</sub> /N <sub>P</sub>	f <sub>G</sub>	f <sub>M</sub> /N <sub>M</sub>	f <sub>P</sub>	f <sub>P</sub> /N <sub>P</sub>	f <sub>H</sub>	f <sub>H</sub> /N <sub>H</sub>	f <sub>G</sub>	f <sub>G</sub> /N <sub>G</sub>	f <sub>P</sub>	f <sub>P</sub> /N <sub>P</sub>		
1 学校へ行くのが	257	16.8	170	22.2	87	11.4	31	6.5	22	70.9	0	0.0	109	21.1	45	41.2	3	2.7	117	21.7	55	47.0	2	1.7						
2 学校を休みたい	324	21.2	180	23.5	144	18.9	92	19.5	36	39.1	5	5.4	120	23.3	41	34.1	10	8.3	112	20.8	51	45.5	0	0.0						
3 学校で勉強するのが	610	40.0	340	44.5	270	35.5	75	15.9	40	53.3	3	4.0	209	40.5	66	31.5	10	4.7	326	60.5	85	26.0	33	10.1						
4 朝なんとなく	735	48.2	359	47.0	376	49.4	156	33.1	58	37.1	7	4.4	263	51.0	80	30.4	13	4.9	316	58.7	90	28.1	17	5.3						
5 家のことが	443	29.0	220	28.8	223	29.3	123	26.1	48	39.0	4	3.2	165	32.0	54	32.7	15	9.0	155	28.8	48	30.9	11	7.0						
6 朝、頭痛腹痛が	423	27.7	195	25.5	228	30.0	115	24.4	51	44.3	4	3.4	168	32.6	56	33.3	8	4.7	140	26.0	49	35.0	7	5.0						
7 学校さえなかったら	367	24.0	230	30.1	137	18.0	92	19.5	54	58.6	5	5.4	131	25.4	47	35.8	2	1.5	144	26.7	61	42.3	3	2.0						
8 学校をよく休む	162	10.6	91	11.9	71	9.3	68	14.4	33	48.5	0	0.0	46	8.9	17	36.9	3	6.5	48	8.9	16	33.3	2	4.1						
9 放課後はすぐ家に	904	59.3	490	64.2	414	54.4	219	46.5	68	31.0	22	10.0	352	68.3	85	24.1	43	12.2	333	61.8	90	27.0	25	7.5						
10 学校でさびしい	210	13.7	74	9.6	136	17.8	48	10.2	32	66.6	0	0.0	66	12.8	29	43.9	0	0.0	96	17.8	40	41.6	4	4.1						
11 学校はきゅうくつ	464	30.4	270	35.3	194	25.5	92	19.5	53	57.6	3	3.2	170	33.0	60	35.2	9	5.2	202	37.5	73	36.1	4	1.9						
12 学校でいやなこと	307	20.1	175	22.9	132	17.3	98	20.8	55	56.1	2	2.0	117	22.7	62	52.9	4	3.4	92	17.1	55	59.7	1	1.0						
13 校門・玄関が	208	13.6	114	14.9	94	12.3	80	17.0	40	50.0	6	7.5	62	12.0	26	41.9	4	6.4	66	12.2	32	48.4	4	6.0						
14 遅刻することが	202	13.2	121	15.8	81	10.6	66	14.0	31	46.9	2	3.0	71	13.7	33	46.4	1	1.4	65	12.0	17	26.1	3	4.6						
15 転校したら	170	11.1	92	12.0	78	10.2	64	13.6	31	48.4	6	9.3	43	8.3	17	39.5	0	0.0	63	11.7	31	49.2	2	3.1						
16 一人で居ることが	202	13.2	97	12.7	105	13.8	85	18.0	38	44.7	6	7.0	62	12.0	29	46.7	1	1.6	55	10.2	24	43.6	0	0.0						
17 登校前、オシッコが	106	6.9	70	9.1	36	4.7	37	7.8	23	62.1	1	2.7	46	8.9	23	50.0	1	2.1	23	4.2	10	43.4	1	4.3						
18 病欠後	212	13.9	101	13.2	111	14.6	70	14.8	43	61.4	1	1.4	73	14.1	38	52.0	2	2.7	69	12.8	42	60.8	0	0.0						
19 春・夏休みの後	605	39.7	334	43.7	271	35.6	148	31.4	67	45.2	7	4.7	201	39.0	73	36.3	8	3.9	256	47.5	79	30.8	13	5.0						
20 保健室へ	108	7.0	53	6.9	55	7.2	34	7.2	21	61.7	0	0.0	36	6.9	18	50.0	0	0.0	38	7.0	17	44.7	1	2.6						
21 学習準備が	1,039	68.2	490	64.2	549	72.2	310	65.9	72	23.2	56	18.0	364	70.6	72	19.7	64	17.5	365	67.8	62	16.9	68	18.6						
22 班長や代表には	760	49.9	381	49.9	379	49.8	171	36.3	48	28.0	15	8.7	284	55.1	64	22.5	38	13.3	305	56.6	70	22.9	21	6.8						
23 仲間はずれ	215	14.1	113	14.8	102	13.4	74	15.7	38	51.3	3	4.0	83	16.1	50	60.2	3	3.6	58	10.7	36	62.0	0	0.0						
24 わかっていても	649	42.6	298	39.0	351	46.1	138	29.3	44	31.8	16	11.5	224	43.4	62	27.6	17	7.5	287	53.3	82	28.5	14	4.8						
25 友達のことを	584	38.3	257	33.6	327	43.0	190	40.4	55	28.9	26	13.6	196	38.0	58	29.5	20	10.2	198	36.8	69	34.8	6	3.0						
26 整理整頓が	909	59.6	365	47.8	544	71.5	278	59.1	65	23.3	48	17.2	328	63.6	60	18.2	62	18.9	303	56.3	60	19.8	57	18.8						
27 教室の席が	287	18.8	167	21.8	120	15.7	102	21.7	53	51.9	3	2.9	104	20.1	49	47.1	2	1.9	81	15.0	39	48.1	0	0.0						
28 友達と遊んでいても	366	24.0	172	22.5	194	25.5	112	23.8	54	48.2	2	1.7	132	25.6	62	46.9	4	3.0	122	22.6	54	44.2	2	1.6						
29 口の中が乾いて	447	29.3	241	31.5	206	27.1	134	28.5	61	45.5	9	6.7	177	34.3	66	37.2	8	4.5	136	25.2	48	35.2	2	1.4						
30 きらいな授業が	337	22.1	204	26.7	133	17.5	101	21.4	58	57.4	0	0.0	113	21.9	56	49.5	0	0.0	123	22.8	66	53.6	2	1.6						
31 給食の好き嫌いが	471	30.9	209	27.3	162	34.4	152	32.3	57	37.5	10	6.5	168	32.6	56	33.3	11	6.5	151	28.0	48	31.7	7	4.6						
32 だれかにジッと	288	18.9	135	17.6	153	20.1	102	21.7	48	47.0	4	3.9	103	20.0	48	46.6	1	0.9	83	15.4	35	42.1	1	1.2						
33 友達が悪口を	463	30.4	210	27.5	253	33.2	128	27.2	55	42.9	5	3.9	168	32.6	70	41.6	5	2.9	167	31.0	70	41.9	6	3.5						

表5 G—P分析の結果及び予兆項目尖度指数

高尖度順 ※≥2.5, ◎≥2, 無印≥1, <.1

項目 番号	低 学 年				中 学 年				高 学 年				尖 度 順		
	$\chi^2$	P	指数	尖度	$\chi^2$	P	指数	尖度	$\chi^2$	P	指数	尖度	低	中	高
1	22.52	P<.001	3.34	※1	46.08	P<.001	1.98	2	66.34	P<.001	2.44	◎3	1	3	2
2	29.48	P<.001	1.58	8	25.29	P<.001	1.33	12	65.79	P<.001	2.45	◎2	2	3	1
3	38.39	P<.001	2.32	◎2	66.55	P<.001	1.38	10	55.89	P<.001	0.86	*2	1	2	3
4	59.28	P<.001	1.54	9	90.22	P<.001	1.31	13	107.10	P<.001	1.24	◎1	1	2	3
5	48.05	P<.001	1.68	7	33.65	P<.001	1.22	14	32.91	P<.001	1.28	8	1	3	2
6	53.06	P<.001	1.92	1	52.94	P<.001	1.47	9	41.69	P<.001	1.61	4	1	3	2
7	57.72	P<.001	2.50	◎1	52.33	P<.001	1.77	4	74.65	P<.001	2.17	◎9	1	3	2
8	37.16	P<.001	2.28	◎4	9.38	P<.005	1.57	7	10.31	P<.005	1.57	5	1	2	2
9	42.74	P<.001	0.99	*1	38.28	P<.001	1.61	*1	86.44	P<.001	1.05	12	3	2	1
10	35.75	P<.001	3.13	※2	31.61	P<.001	2.26	◎6	35.69	P<.001	2.02	◎12	1	2	3
11	59.54	P<.001	2.55	※7	57.55	P<.001	1.55	8	97.64	P<.001	1.84	1	1	3	2
12	66.34	P<.001	2.54	※8	73.47	P<.001	2.55	※3	69.66	P<.001	3.16	※3	3	2	1
13	32.63	P<.001	2.00	◎9	17.29	P<.001	1.83	3	24.69	P<.001	2.28	◎6	2	3	1
14	28.45	P<.001	2.07	◎7	34.05	P<.001	2.32	◎5	9.38	P<.005	1.16	11	2	1	3
15	20.72	P<.001	1.84	3	16.45	P<.001	2.04	◎8	28.45	P<.001	2.48	◎1	3	2	1
16	29.83	P<.001	1.77	6	28.58	P<.001	2.33	◎4	25.04	P<.001	2.35	◎4	3	2	1
17	20.89	P<.001	2.80	※5	20.88	P<.001	2.46	◎1	6.15	P<.02	2.11	◎10	1	2	3
18	48.98	P<.001	2.82	※4	38.28	P<.001	2.54	※5	50.66	P<.001	3.28	※2	2	3	1
19	77.22	P<.001	1.91	2	87.66	P<.001	1.67	6	87.68	P<.001	1.38	7	1	2	2
20	21.28	P<.001	2.90	※3	17.64	P<.001	2.58	※2	13.73	P<.001	2.27	◎7	1	2	3
21	5.55	P<.02	0.24	*6	1.47	P<.3	0.11	*3	0.79	P<.5	0.09	*4	1	2	3
22	25.23	P<.001	0.91	*3	13.52	P<.001	0.47	*2	48.41	P<.001	0.86	*1	1	3	2
23	35.46	P<.001	2.22	◎5	54.31	P<.001	2.92	※1	41.49	P<.001	3.34	※1	3	2	1
24	18.66	P<.001	0.95	*2	42.36	P<.001	1.03	15	92.62	P<.001	1.27	9	3	2	1
25	17.44	P<.001	0.72	*4	30.34	P<.001	1.00	16	84.67	P<.001	1.71	3	3	2	1
26	5.87	P<.02	0.29	*5	0.08	P<.8	0.03	*4	0.18	P<.7	-0.05	*3	1	3	2
27	59.54	P<.001	2.30	◎3	55.69	P<.001	2.33	◎3	45.99	P<.001	2.59	※5	3	2	1
28	64.50	P<.001	2.18	◎6	73.47	P<.001	2.26	◎7	64.50	P<.001	2.29	◎5	3	2	1
29	59.42	P<.001	1.82	5	72.15	P<.001	1.69	5	54.00	P<.001	1.82	2	1	3	1
30	78.89	P<.001	2.70	※6	75.02	P<.001	2.55	※4	88.43	P<.001	2.80	※4	2	3	1
31	49.57	P<.001	1.45	10	45.44	P<.001	1.38	11	42.15	P<.001	1.46	6	2	3	1
32	48.05	P<.001	2.03	◎8	57.19	P<.001	2.35	◎2	36.89	P<.001	2.20	◎8	3	1	2
33	59.52	P<.001	1.84	4	87.38	P<.001	1.99	1	86.92	P<.001	2.06	◎11	3	2	1

中学年で予兆反応を示す児童が最も多様化している事を意味し、拒否傾向児が潜在化し易い時期と推察される。

4 結 語

第1次調査から、小学生児童総数 1,523 名の回答を得学年段階別の登校拒否傾向の状況及び予兆の傾向を統計的に比較考察することができた。また、小学生児童学年段階別登校拒否傾向測定尺度を作成した。要約すると、

第1に、小学生児童において、性差による登校拒否傾向の有差はなかったが、中学年男一女間で、男子が拒否傾向大の有差を示した。また、学年段階間では、中一高学年間に有意差はなく、両学年共に低学年に比べ拒否傾向大の有差を示した。各学年間では、第2学年が他の全ての学年に比べ拒否傾向小の有差を示し、学校生活に最も適応を示す学年と考えられ、適応指導上重要な時期であると思われる。

第2に、低学年において、9割以上の児童は「学校が楽しくない」とは認知していないが、中学年以降は半数以上の児童が「学校は、朝には抵抗を感じ、授業終了後はすぐ帰宅したくなる場である」と認知しており、児童にとって、家庭に次ぐ第2の生活の場としての学校の在り方が問われているものと思われる。

第3に、登校拒否の予兆傾向として、予兆項目の尖度指数化により、低学年では学校認知に関して、中・高学年では対人関係に関する項目が中心をなしていることが示され、学年がすすむにつれ、学校認知とは逆に対人関係に関する項目が順次高尖度になり重層化していることが示された。また、中学年は低・高学年に比べ、予兆反応を示す児童が多様化しており、拒否傾向児が潜在化し易い時期であると推察される。

以上、33の予兆質問項目の反応状況を拠り所に考察をすすめた。更に第2次調査での予兆の要因分析と合わせより具体的に予兆理解を深める必要があるが、第2次調査の結果は別に報告したい。

本研究をすすめるにあたり、多大な御協力を賜りました函館市内の3つの小学校の諸先生方、児童の皆様、北海道立教育研究所の諸先生方、旭川児童相談所の大橋昭三所長、竹内 努氏、北見児童相談所の平沢成一氏、本課程一期生多賀谷智氏、二期生時田 隆氏に深謝申し上げます。

文 献

- 1) 原岡一馬：登校拒否の要因分析，佐賀大学教育学部研究論文集，第20号，67-90，1972.
- 2) 岐阜県教育センター協会：学校における登校拒否の教育相談，玉井収介監修，教育出版社，1980.
- 3) 時田 隆：学校における適応指導のあり方を求めて，北海道教育大学情緒障害教育研究紀要，第2号，57-60，1983.

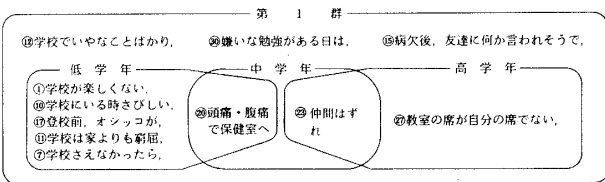


図2 学年段階別高尖度予兆項目第1群例

があげられた。更に低学年では、①学校が楽しくない、⑩学校にいる時さびしい、⑰登校前オシッコが、⑪学校は窮屈、⑦学校さえなかったら、があり、高学年では、⑳教室の席が自分の席でない、があげられている。

これらより、低学年では学校認知に関して、中学年以上では対人関係に関する予兆が中心をなしているものと考えられる。また、表5によると、学年段階により、同一項目の尖度に変化がみられ、学年がすすむにつれて順次尖度が高くなっている項目には、⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚の9項目あり、主に対人関係に関する予兆が中心をなしている。次に、学年がすすむにつれ順次尖度が低くなっている項目は、③④⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯の7項目あり、主に学校認知に関する予兆が中心をなしている。中学年で最も尖度が高くなっている項目は⑭⑮の2項目のみであり、逆に、①②⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚の15項目にわたって、低・高学年に比べ尖度が低くなっている。これは、